

Textiles Unearthed from the 1A-Tomb 1 of Talin gorvan kherem fortress I in Mongolia (4th – 6th centuries CE)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MURAKAMI, Tomomi, OCHIR, Ayudai, CHEN, YongZhi, ANKHBAYAR, Batsuuri, SARENBILIGE, Chahar, CHENG, PengFei, TSERENBYAMBA, Khujaa, DANDAER メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061893

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



モンゴル国タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓から出土した 4～6 世紀の染織品

村上 智見・A. オチル⁽¹⁾・陳永志⁽²⁾
B. アンフバヤル⁽³⁾・薩仁畢力格⁽⁴⁾
程鵬飛⁽⁵⁾・Kh. ツェレンビヤンバ⁽⁶⁾・丹達爾⁽⁷⁾

I. はじめに

モンゴル高原では染織品が比較的良好な保存状態で出土することがある。最もよく知られているものとして匈奴期の保存状態良好な資料群が挙げられるが⁽¹⁾、以降は唐代並行期⁽²⁾とウイグル帝国期⁽³⁾にある程度まとまった資料があるのみで、モンゴル帝国期に入ってようやく出土例が増加する。その他の時期のものに関しては残存可能な埋蔵環境になかったためか、わずかな断片資料を除いてほとんど確認されていない。本稿で取り上げるタリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓は 4～6 世紀の墓とみなされており、断片状態ではあるものの染織品が出土している。モンゴル高原では 5～6 世紀にかけて柔然が当該地域を支配していたが、実物資料の不足からこれまで当該時期の服飾・染織文化に関しては、主に文献史料によって考察が行われてきた⁽⁴⁾。タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓出土染織品は、この空白期を埋める実物資料として重要であることから、本稿では当該時期のモンゴル高原においてどのような染織文化が存在していたのか、その一端を明らかにすることを目的に出土染織品調査を実施し、中国史書の記述を参照しつつ考察した。

(1)オチル・アユダイ Очир Аюдай (モンゴル遊牧文化研究所, Нүүдлийн Соёл Иргэншлийг Судлах Олон Улсын Хүрээлэн)

(2)陳永志 (内蒙古自治区文物考古研究所)

(3)アンフバヤル・バトスーリ Анхбаяр Багсуурь (内蒙古大学, Өвөр Монголын Их Сургууль)

(4)薩仁畢力格 Чахар Сарэнбилигэ (内蒙古博物院)

(5)程鵬飛 (内蒙古博物院)

(6)ツェレンビヤンバ・ホジャー Цэрэнбямба Хужаа (ザナバザル美術館, Г. Занабазарын нэрэмжит дүрслэх урлагийн музей)

(7)丹達爾 Дандар (内蒙古自治区文物考古研究所)

II. 遺跡の概要

タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址はモンゴル国アルハンガイ県オギーノール郡に所在する遺跡であり(図 1)、東西に 3 つの城址が並ぶことからタリン・ゴルワン・ヘレム「平原の 3 つの城址」「三連城」と呼ばれている(図 2)。

2014 年のモンゴル・中国共同発掘調査により、匈奴期の I 号城址 1A 土壇上に築かれた 1 号墓が調査され、木棺に納められた人骨が出土した(図 3, 4)。



図 1 遺跡の位置

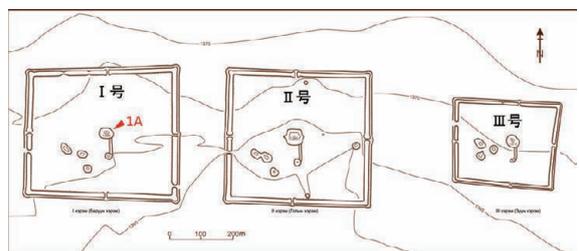


図 2 3 基の城址と I 号城址 1A の位置

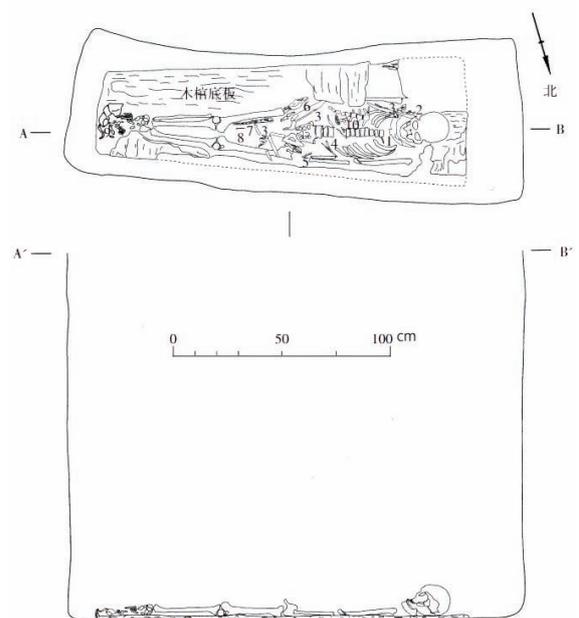
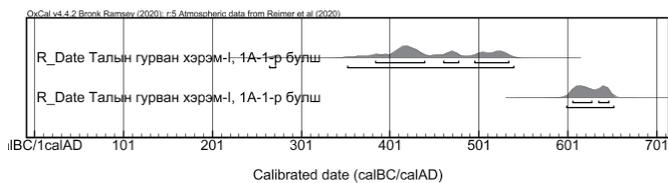


図 3 1A-1 号墓 平・断面図



Col. No.	Material type	Sample ID/ Lab ID	Conv. age (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Age (cal BC/AD)	
					68.2 % probability	95.4% probability
3165.1.1	Wood (coffin)	KK-M1 (University of Cologne)	1640 ± 33	-23.7	384AD (37.1%) 439AD	265AD (1.2%) 272AD
					460AD (9.9%) 478AD	353AD (94.2%) 540AD
					496AD (21.3%) 534AD	
17		BA150063 (Peking University)	1430 ± 20	-	606AD (44.4%) 627AD	600AD (95.4%) 652AD
					635AD (23.9%) 646AD	

図 4 1A-1 号墓の放射性炭素年代測定値



図 5 1A-1 号墓 人骨出土状況

形質人類学的調査により、被葬者は 65 歳程度のモンゴロイド男性と判明した。木棺の放射性炭素年代測定⁶⁾や出土遺物の様相から、柔然期の墓と結論付けているが、同時期に柔然以外の集団も存在していたことから、被葬者の族属を比定するにはさらなる検討が必要である⁶⁾。

被葬者は三日月状の青銅製頸部飾を身に付けており(図 5)、頭部右側からは垂飾付きの金製装飾金具が出土した。この他、青銅匙や土器、骨製品、鉄製品、木製品、青銅製距骨、染織品などが出土した。染織品の保存状態は悪く、断片状態であることから形状や色彩を復元することは難しいが、いずれも被葬者が身に付けていた衣服や袋などの携帯品の一部とみられる。断片状態であるものの、技法と材質を明らかにするには十分な形状と強度を保っていることから、材質および技法調査を実施した。

Ⅲ. 材質・技法

出土染織品類の材質・技法を明らかにすることを目的に、詳細な調査を実施した。染織品を種類ごとに分類し、織組織、織密度、糸径、糸撚を計測し

た。資料の観察にはハンディマイクロスコープを用いた。また、材質が不明なものに関して繊維材質調査を実施した。繊維材質調査に際しては資料を破壊することなく、劣化により資料から脱落したものなど極微量の繊維くず(数mm)を用いた。

1. 平織物 (IA-M1:2) (図 6, 7, 8)

用途：頭飾？

材質：絹

技法：平織

織密度 (/cm)：60 × 44

糸径 (mm)：0.08 ~ 0.1、0.1 ~ 0.15

糸撚：なし

垂飾付き金製装飾金具および帯状青銅製金具片と重なるように、被葬者の頭部右側より出土した⁷⁾。発見当時、金製装飾金具は絹糸によって織物と縫合された様子がかろうじて確認できたが⁸⁾、劣化が著しく、現在はそれぞれ分離した状態となっている。帯状青銅製金具片は頭部結束具の一部である可能性が指摘されており、平織は被葬者の頭部を飾った被り物の可能性がある⁹⁾。

材質は絹、技法は平織である。平織は織物の中で最も単純な組織であり、経糸と緯糸を一越ずつ交差させたものである。本資料の織密度は細かく、単糸にはばらつきが少なく高品質である。撚りをかけない引き揃えた絹糸、もしくはわずかに S 方向に撚られた絹糸は、中国を中心とした東アジア製絹糸の特徴の一つと言える¹⁰⁾。絹の平織物の場合、織密度の高い方が経糸と考えられる。

2. 平織物 (IA-M1:12) (図 9, 10)

用途：不明

材質：絹

技法：平織

織密度 (/cm)：64 × 49

糸径 (mm)：0.07 ~ 0.15、0.1 ~ 0.15

糸撚：なし

材質は絹、技法は平織である。織密度は細かく、撚りのない引き揃えの絹糸を使用している。衣服などの一部であったと考えられる。写真(図 9)右の



図 6 平織物 (IA-M1:2)



図 9 平織物 (IA-M1:12)

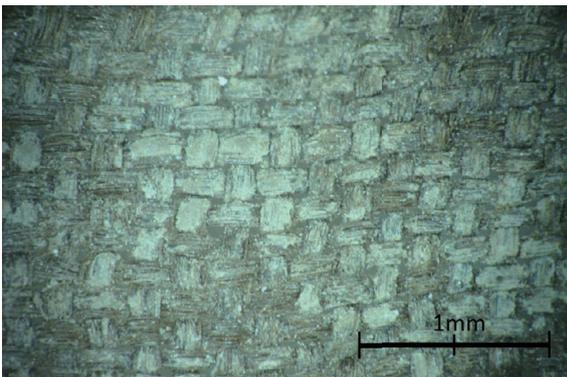


図 7 平織物 (IA-M1:2) 拡大

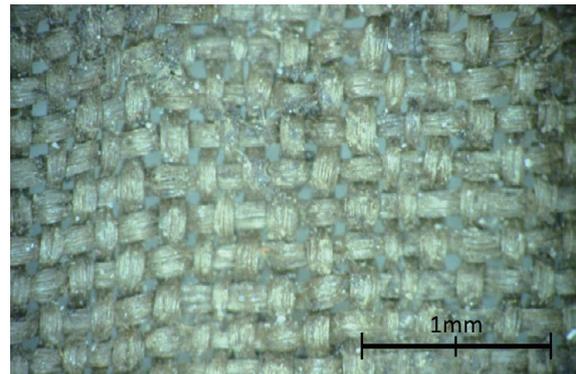


図 10 平織物 (IA-M1:12) 拡大

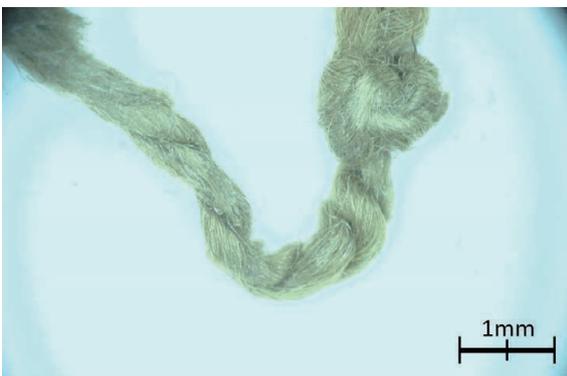


図 8 平織物 (IA-M1:2) 縫糸

2 断片は皮製布地である。

3-1. 未分類 (番号なし) 平織物① (図 11, 12)

用途：不明

材質：絹

技法：平織

織密度 (/cm) : 53 × 37

糸径 (mm) : 0.15 ~ 0.2、0.2 ~ 0.25

糸撚：なし

材質は絹、技法は平織である。撚りのない引き揃えの絹糸を使用している。1(IA-M1:2)、2(IA-M1:12)の絹織物と比較して織密度はやや落ち

るが、充分細かく高品質である。本資料は小断片や繊維片が混在する未分類資料中に確認したものであり、小断片であることから用途を推測することはできないが、衣服など身につけるものの一部であったと考えられる。

3-2. 未分類 (番号なし) 平織物② (図 11, 13, 14)

用途：不明

材質：獣毛 (羊?)

技法：平織

織密度 (/cm) : 26 × 8

糸径 (mm) : 0.5 ~ 1、0.3 ~ 0.6

糸撚：Z 撚り

獣毛製の毛織物である。技法は平織物であり、糸はZ方向(左撚り)に強く撚られている。単糸径は1mmにも満たず、毛織物にしては細く織密度も高いことから、丁寧に紡がれた糸を用いて織られたことが分かる。本資料についても小断片や繊維片が混在する未分類資料中に確認したものであり、小断片であることから用途は不明であるが、生地は薄く柔らかであったと推測され、袋などの頑丈で耐久性を要するものには向かず、衣服などの肌に触れるものであった可能性がある。



図 11 未分類繊維 全体

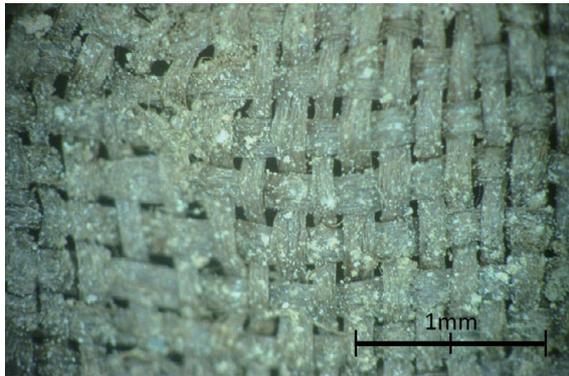


図 12 未分類繊維 平織物①

モンゴル高原から出土した毛織物を観察すると Z 方向に撚られた糸がほとんどであり、早くとも匈奴期には Z 撚糸が主流となっていたようである⁽¹⁾。毛糸は紡錘車によって紡がれたと考えられ、同じ製糸法が長期にわたってモンゴル高原において伝統的に継承されてきたと考えられる。

繊維材質調査の結果、材質の同定にはいたらなかったが、10～15 μ m 程度の細番手の獣毛であることから、想定される品種としては、ヒツジ、ラクダ、カシミア系ヤギの内毛などが考えられる。繊維表面に見られるスケール(鱗状細胞)の形状からは羊毛に最も近い特徴が見られた。

4. 毛皮製品 (IA-M1:11) (図 15, 16, 17)

用途：袋？

材質：毛皮・絹糸

糸径 (mm)：0.5～0.7

糸撚：不明

劣化が著しいが、表面にはわずかに獣毛繊維が残っており、毛皮製品であることが分かる。

本資料の縁に施された組紐様の糸を繊維材質調査した結果、絹繊維が確認された。中国より絹糸を取

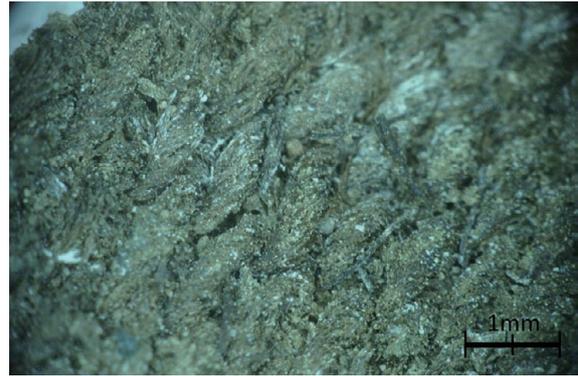


図 13 未分類繊維 平織物②

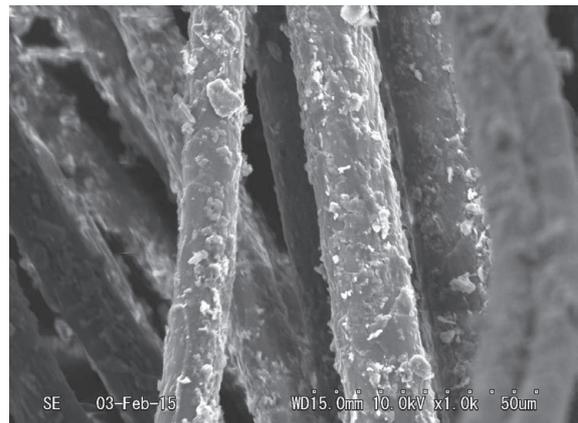


図 14 未分類繊維 平織物② SEM 像

り寄せて現地で製作したのかもかもしれない。

一見するとこの縁飾りは組紐を縫い付けたように見えるが、刺繍するように一針一針、皮に糸を通して見えるように見える。刺繍は少なくとも三列を成している。おそらく皮の布地を 2 枚合わせて、その端を絹糸で縁飾り縫いして頑丈にし、袋にしたものと考えられる。袋として使用するには頑丈に縫い合わせる必要があるが、縁飾り縫いを施すことで美しい組紐様を呈し、縫い合わせ部分の強化だけでなく、装飾の効果も付与している。皮同士を縫い合わせるのであれば、匈奴期の資料に見られるように動物の腱で作られた強固な糸が適しているはずだが、縫糸に絹糸を選択しているのは、やはり装飾的效果を狙ったことだろう。この時期にこのような美しい縁飾り縫い技法が存在していたことは重要な発見である。皮革を多用する文化の中で、より美しく見せるためこのような縫合技法が編み出された可能性がある。

当該資料は青銅製の距骨および木製品とともに出土したことから、被葬者が携帯していた皮袋と考えられる。毛皮であること、絹糸の縁飾りが施されていることから、明らかに見せるためのアイテムであり、被葬者の右寛骨付近から出土したことから、

おそらくは腰に下げて使用されていたものと推測される。

毛皮の繊維材質調査を行った結果、繊維表面に見られるスケール(鱗状細胞)は、モンゴル現生のウサギ毛にやや似た特徴を示しているが、試料の不足と著しい劣化のため特定には至らなかった。

IV. 柔然期の染織文化

タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓の被葬者が柔然人であるとは断定できないものの、墓は柔然の支配期に属するとみなされることから、中国史書に記された柔然人の染織・服飾に関する記述を参照しておきたい。柔然人の衣服については内田吟風が『北アジア史研究 鮮卑柔然突厥篇』の中でまとめている通りであるが、ここで改めて漢文史料中の記述を抜粋する。『南齊書』および『梁書』は柔然人の衣服について次のように記述している。

『南齊書』卷五九「芮芮虜伝」[中華書局標点本:1023]

芮芮虜、塞外雜胡也。編髮左衽。(中略)土氣早寒、所居為穹廬氈帳。

『南齊書』卷五九「芮芮虜伝」[中華書局標点本:1024]

獻師子皮袴褶、皮如虎皮、色白毛短。時有賈胡在蜀見之、云此非師子皮、乃扶拔皮也。

『梁書』卷五四「諸夷伝芮芮国条」[中華書局標点本:817]

辮髮、衣錦、小袖袍、小口袴、深雍鞞。

これによると柔然の人々は、^{さじん}左衽の上衣、細身のズボン、袖口の狭い上着、そしてブーツを身に着けていたようである。^{ひこし袴}「皮袴褶」とあることから、皮製のズボンも用いられていたことが分かる。タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓からも皮製布地(図9の右2点)が出土しており、衣服の一部であった可能性がある。この他、「腰間皮袋」の記述も見えることから、腰には皮袋を下げていたようである⁽¹²⁾。棒状木製品や青銅製距骨が入れられた毛皮製品(IA-M1:11)も、腰から下げる皮袋の可能性はある。

タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓からは、毛皮製品・皮製品の他にも、毛織物や毛の縄状製品が出土しているが、これらの製品は当地において伝統的に製作・使用されてきたものであり、彼ら自身の手で製作されたものと考えられる。柔然がフェルトの天幕(氈帳)や皮製の衣服(袴など)を



図 15 毛皮製品 (IA-M1:11)



図 16 毛皮製品 (IA-M1:11) 縁飾部

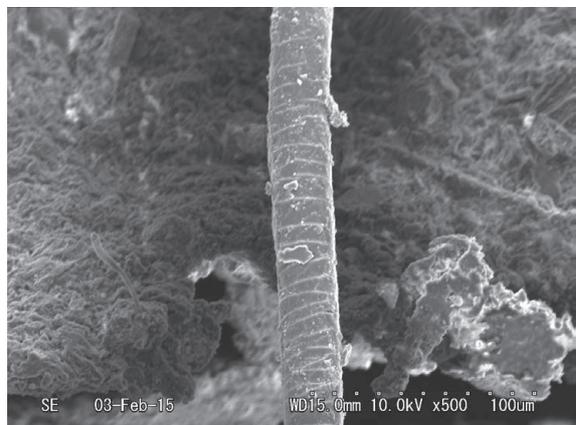


図 17 毛皮製品 (IA-M1:11) SEM 像

着用し、貂皮などの希少な毛皮類を中国へ献上していたことは、漢文史料に記されている通りである⁽¹³⁾。もちろん、中国においても毛糸や毛皮は生産・使用されていたであろうが、これらの素材を豊富に入手することができ、製品に加工する優れた技術を伝統的に有していたであろう彼らが、わざわざ他所から取り寄せる必要はなかったはずである。匈奴期には中国製の絹織物と遊牧民の染織技法であるフェルトを組み合わせた染織品がみられるが⁽¹⁴⁾、これは中国製の絹を利用して匈奴自身の手により自らの好みに仕上げたものであったと考えられる。前述の

毛皮製品 (IA-M1:11) に関しても、絹糸による縁飾りが施されていることから、中国製絹糸を用いて現地で製作した可能性がある。

一方で史料には「衣錦」と見えることから、一部の身分の高いものに限られるだろうが、絹の衣服も身に着けていたことがわかる。絹織物の産地については、その多くが中国製であったと想定される。絹を生み出す蚕を育てるためには、餌となる桑葉や適度な温湿度環境が必要であり、柔然の領内において養蚕を行う事は難しかったと考えられる。製品としての絹糸を中国より取り寄せ、領内で絹織物を製織した可能性は排除できないが、その証拠は今のところ見つかっていない。織工に関して南齊書には次のような記述がある。

『南齊書』卷五九「芮芮虜伝」〔中華書局標点本：1025〕

芮芮王求醫工等物、世祖詔報曰：「知須醫及織成錦工・指南車・漏刻、竝非所愛、南方治疾與北土不同、織成錦工竝女人、不堪涉遠。指南車・漏刻、此雖有其器、工匠久不復存、不副為悞。」

柔然が永明年間に南齊の織工⁽¹⁵⁾を求めてきたが、南齊側は「工人がみな女性のため道のりの遠さに耐えられない」との理由で断ったことが記録されている。このことから、柔然は自ら絹織物を生産することを欲したが、南齊側は医者や指南車⁽¹⁶⁾、漏刻⁽¹⁷⁾などと共に、絹織技術に関しても柔然へ流出することを警戒していた様子が覗える。

一方で製品としての絹織物は、中国から柔然へ相当量もたらされていたと考えられる。柔然は 4～6 世紀の間に中国王朝へ入寇あるいは朝貢等を繰り返し行っており、貂などの毛皮や馬を献上したことが記録されている⁽¹⁸⁾。このような機会に際しては、その都度、高価な中国製品が贈られたであろうから、その中には当然、中国の特産品である絹織物も含まれていたと考えられる。蠕蠕伝には以下のとおり複数種類の染織品が登場する。

『魏書』卷一〇三「蠕蠕伝」〔中華書局標点本：2300〕

(前略) 五色錦被二領・黄紬被褥三十具・私府繡袍一領并帽・内者緋納襖一領・緋袍二十領并帽・内者雜線千段・緋納小口袴褶一具・内中宛具・紫納大口袴褶一具・内中宛具・百子帳十八具・黄布

幕六張(後略)

正光二年(521)、北魏に滞在していた柔然可汗の阿那瓌が北の故郷へ戻る際に、武器や武具、食品や家畜などと共に、褥や衣服、天幕等の染織品を贈ったことが記されており、錦や綾、紬といった絹織物の種類も見える。

ここで同時期の北魏および南朝における絹織物生産について触れておく。『齊民要術』には養蚕について詳しく記されており、北魏において高度な養蚕技術を用いた絹生産が行われていたことが分かっている⁽¹⁹⁾。さらに、拓跋珪が皇始 2 年(397)に後燕の中山を攻めた際、職人を含む 10 万余名を国都である平城へ連行し⁽²⁰⁾、太平真君 7 年(446)には太武帝拓跋焘も長安の職人 2000 家を平城へ移住させていることから⁽²¹⁾、それらの中には織工や染工等も含まれていたと考えられ、この職人の大移動によって北魏の絹織物業はさらに発展したものと推測される。南朝においては東晋以降、鬪場錦署が官営工房として機能していた。これは、東晋の劉裕が義熙 13 年(417)に後秦を討伐した際に、職人を含む民間人 6 万世帯を長安から南方へ、また長安の工匠を建康に移住させた際に設立したものであった⁽²²⁾。6 世紀末の『顔氏家訓』には南北の女性の風習の違いが記されており、江東の女性より河北の女性の染織工芸がより優れていると述べられている⁽²³⁾。漢代まで先進的地域であった陳留襄邑(現在の河南省商丘市睢県)の絹織物業が衰退し、北方では民間レベルでも高い技術の染織品が生産されていた様子が伺える。

以上のように、中国王朝から柔然へ多くの絹織物がもたらされたことは漢文史料からも知ることができる。どのような経緯でモンゴル高原へもたらされたものかは分からないが、タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓から出土した絹の平織物も中国製の特徴を示している。上述の織工を欲したエピソードからも、柔然が絹織物を渴望していたと推察されることから、政治的なルートによるものだけでなく、経済活動によっても絹を入手していたことだろう。漢文史料に記された染織品に関する記録はごく一部であり、多くの中国製染織品がモンゴル高原へもたらされたものと考えられる。

柔然は中国製の他に西方製の絹織物も入手していたことは、すでに内田氏が指摘しているとおりであ

る²⁴。

V. おわりに

タリン・ゴルワン・ヘレム I 号 1A 墓から出土した染織品を調査した結果、絹の平織物、毛の平織物、毛皮製品が確認された。このうち絹の平織物は中国製と考えられ、毛の平織物と毛皮製品は現地で製作されたと推測した。断片状態で出土したことから用途を確定することは難しいが、被葬者が着用あるいは携帯していたものであることは間違いなく、衣服などの残欠であると考えられる。絹や皮で作られた衣服や袋を身に着けるといふ漢文史料上の記述を、タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓出土の実物の染織品によって裏付けることができたと考えられる。毛皮製品 (IA-M1:11) には中国製の絹糸を用いた縁飾りが施されていたが、これは絹を中国より取り寄せて毛織物やフェルトと組み合わせるなどして自ら加工していた匈奴とも共通する点であり興味深い。また、毛皮製品 (IA-M1:11) に施された縁飾り縫い技法は知る限り他に例がなく、染織研究においてこれまで空白期となっていた 4～6 世紀のモンゴル高原においても、絹を自らの服飾文化に取り入れていたこと、皮革製品の優れた装飾技術を有していた可能性があることなどが明らかとなった。タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓出土染織品は断片資料ではあるものの、資料の乏しい 4～6 世紀のモンゴル高原における染織文化を復元する上で重要な資料として位置付けられるだろう。

モンゴル高原には各時代を通して絶えず中国製の絹が流入し、西方とも交流していたことが史料には記されるが、実物資料の不足から実際にどのような染織・服飾文化が存在していたのか不明な点が多い。今後資料の増加を待って、各時代のモンゴル高原における染織・服飾文化を明らかにしていきたい。

謝辞：

本研究を行うに当たり、調査場所を快く提供してくださいましたモンゴル国立カラコルム博物館、奈良大学の皆様、調査をサポートしてくださいましたメンドバザル・オユントルガ氏 (Мендбазар Оюнтулга)、オドフー・アンガラグスレン氏 (Одхүү Ангарасүрэн)、有益なご助言をくださいました林俊雄先生、大谷育恵先生、齊藤茂雄先生、その他ご

協力くださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

註：

- 1) ノイン・ウラ遺跡出土品については、梅原 [1960: 50-83] を参照。
- 2) ボルガン県^{アイマク}バヤンノール郡^{ソム}に位置する唐様式墓から中国製および西方製とみられる 7 世紀の染織品が出土している。詳細は報告 [村上 2021] を参照。
- 3) アルハンガイ県^{アイマク}オロン・ドフ遺跡 26 号墓などからウイグル帝国期の服飾品が出土している。資料は下記参照 [Erdenebat, Batbayar 2013: 195-215]。
- 4) 内田吟風 [1975: 297-299] によって柔然の服飾風俗について中国史書の記述がまとめられている。
- 5) 北京大学の他、ケルン大学でも測定が実施された。
- 6) 柔然に関連する可能性が高いと結論付けられているものの、「モンゴル国においてはポスト匈奴・先チュルクの時期にあたる遺跡は発掘調査によってようやく確認され始めた段階であり、考古資料から族属比定の議論をする段階にはない」との大谷育恵の指摘 [2021: 4] がある。
- 7) 発掘調査者による。
- 8) 保存修復担当者による。
- 9) 青銅部分が頭部結束の断片である可能性を指摘している [大谷 2021: 3]。
- 10) タリム盆地以西のフェルガナやソグディアナなどから出土する現地製と見られる絹織物には、製糸法が異なるためか、Z 方向に撚りをかけた絹糸が多くみられる傾向にある。
- 11) 今日のモンゴル高原においても、縄やフェルトなどに匈奴期から変わらない技法が見られる [村上 2016: 683-685]。
- 12) 柔然資料輯録 [中國科學院歴史研究所史料編纂組編: 52] に記載あり。原典は『大藏經續高僧傳』第二十五頁上魏洛京永寧寺天竺僧勒那漫提傳。
- 13) 『南齊書』卷五九「蠕蠕虜伝」 [中華書局標点本: 1023]
- 14) ノイン・ウラ遺跡出土のフェルトカーペットなど。現在はモンゴル国立歴史博物館とロシアのエルミタージュ美術館に所蔵されている。
- 15) 「織成錦工」について、内田吟風は織成および錦を織る工人としている。
- 16) コンパスの役割を果たすもの。
- 17) 水時計のこと。

- 18) 柔然入寇年表 [林 1983] を参照。
 19) 華北の農業や牧畜などに関する農書であり、養蚕については桑の種類から繁殖法、収穫法に至るまで詳しく記されている。
 20) 『魏書』巻 2 「太祖記」 [中華書局標点本: 32]。
 21) 『魏書』巻 4 下 「世祖記」 [中華書局標点本: 100]。
 22) 山謙之『丹陽記』(北宋 李昉『太平御覽』巻 815: 3624)。北方の先進的な技術を導入し、417 年に南京城内南の河畔にあった闕場寺に作られた最初の官営工房であったという [黄能馥・陳娟娟 2015: 76, 482]。
 23) 「河北婦人、織紵組紉之事、黼黻錦繡羅綺之工、大優於江東也」とあり、河北の女性は絹物や組紐を編むこと、黼黻、錦、繡、羅、綺といった手芸では江東より優れていると述べられている。「黼黻」とは、林田愼之介訳 [顔之推著, 林田訳 2018: 37] によると二色の糸で幾何学文様を刺繍した織物のこと。
 24) 内田吟風は、「西河記」に「西河無蚕桑、婦女以外國異色錦為袴褶」とあること、エフタルと通交通婚していたことなどから、柔然が西方より絹織物を入手していたと推測している [内田 1975]。

図版出典：

- 図 1 著者作成
 図 2 吉林大学考古学院ほか 2020, p.21 図 2 に加筆
 図 3 内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015, p.34 図 2
 図 4 測定値については、内蒙古自治区文物考古研究所ほか [2015: 40-41] に基づく。OxCal online で再較正。
 図 5 内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015, p.34 図 3; Ochir A. et al. 2015, p.384 図 4
 図 6 ~ 8, 10 ~ 17 著者
 図 9 内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015, p.38 図 17

引用・参考文献：

<日本語>

- 石松日奈子・中川原育子・影山悦子 2012 『古代中国を取り巻く胡漢諸民族の服飾に関する調査研究』平成 21 年～ 23 年度 文部科学省委託 服飾文化共同研究拠点事業報告。
 内田吟風 1975 『北アジア史研究 鮮卑柔然突厥篇』同朋社。
 梅原末治 1960 『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』(東洋文庫論叢 第 27 冊) 東洋文庫。

黄能馥・陳娟娟 2015 『中国絹織物全史 七千年の美と技』科学出版社(東京)・国書刊行会。

大谷育恵 2021 「モンゴル国で新たに確認された金属製の頭部結束具と頸部飾を伴う埋葬事例について」『金大考古』79 金沢大学人文学類考古学研究室:1-7。

布目順郎 1992 『目で見える繊維の考古学: 繊維遺物資料集成』染織と生活社。

林俊雄 1983 「鮮卑・柔然における農耕と城塞」『古代オリエント論集 江上波夫先生喜寿記念』古代オリエント博物館: 377-394。

顔之推 [著], 林田愼之助 [訳] 2018 『顔氏家訓』講談社学術文庫。

本田治 1973 「宋代兩漸地方の養蚕業について一特にその技術的展開を中心に一」『待兼山論叢 史学篇』6: 41-58。

村上智見 2016 「モンゴル匈奴が利用した繊維材質に関する研究」『繊維機械学会誌』69(11): 681-687。

村上智見 2021 「モンゴル国の唐様式墓から出土した染織品: 僕固乙突墓とオラーン・ヘレム壁画墓」『金大考古』79 金沢大学人文学類考古学研究室: 52-67。

<中国語>

吉林大学考古学院・内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究国際学院・内蒙古博物院・内蒙古師範大学 2020 「アルハンガイアイマクネギーノールソム 蒙古国後杭愛省 烏貴諾爾蘇木ヘルメンタル 和日門塔拉城址発掘簡報」『考古』2020-5: 20-37。

内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究国際学院 2015 「アルハンガイアイマクネギーノールソム 2014 年蒙古国後杭愛省 烏貴諾爾蘇木ヘルメンタル 和日門塔拉城址 I A-M1 発掘簡報」『草原文物』2015-2: 32-41。

中國科學院歷史研究所史料編纂組編 1962 『柔然資料輯録: 中國科學院歷史研究所資料叢編』中華書局。

<モンゴル語>

Erdenebat U., Batbayar T.: Эрдэнэбат У., Батбаяр Т., 2013, Хар Балгасын оршин суугчдал холбогдох шинэ олдворууд, Археологийн даавуу, зөөлөн эдлэлийн судалгааны хэрэглэгдэхүүн, *Toms XXXIII*, УБ. [「ハル・バルガス住民に関する新たな出土資料」『考古出土織物、脆弱資料研究の資料』33 巻]

Ochir A., Chen Yong-zhi 陳永志, Sarenbilige Ch. Ankhbayar B. 薩仁畢力格, Tserenbyamba Kh.: Очир А., Чэнь Ёнжи, Анхбаяр Б., Саранбилэг Ч., Цэрэнбямба Х. 2015, Талын гурван хэрмийн Жужан булш, *Археологийн судлал, Том. XXXV*: 380-404. [「タリン・ゴルワン・ヘレムの柔然墓」『考古学研究』35]